

国 語

2025年度 一般選抜試験(前期)

医療衛生学部

【注 意 事 項】

1. 国語の問題は55ページから84ページまであります。
2. 解答用紙(マークシート)の氏名・受験番号欄に記入・マークすること。
3. 選択科目欄に選択する科目を記入・マークすること。
4. 解答は解答用紙(マークシート)の解答欄にマークすること。
5. マークする際は濃くはっきりとマークすること。その際、ボールペン・サインペン・万年筆等を使用しないこと。その他マークの仕方に関しては、解答用紙(マークシート)の注意事項をよく読むこと。

I 次の文章を読んで、後の問1～問10に答えなさい。

「環境問題としての医療」と記すと、奇妙な印象を受ける人が多いかもしれません。全く異質の問題である「医療」と「環境」とがなぜ結びつくのか。ところが、実は医療あるいは健康をめぐる様々な課題と、環境とは次のような意味で深く関連しているのです。

そもそも私たちはなぜ病気になるのでしょうか。あるいは、人間にとって病気とは一体何でしょうか。こうしたAなテーマについて、90年代頃から大きく発展してきた分野に「進化医学 (Evolutionary Medicine)」と呼ばれるものがあります。進化医学とは、人間にとつての病気というものの意味を原点に立ち返って掘り下げる研究領域であり、その基本的な理解は「病気とは、環境に対する個体の適応の失敗あるいはその「ズレ」から生まれる」というものです。要するに、人間あるいは個人が、周囲の環境に十分に適応できないところに病気が生まれると考えられるのです。

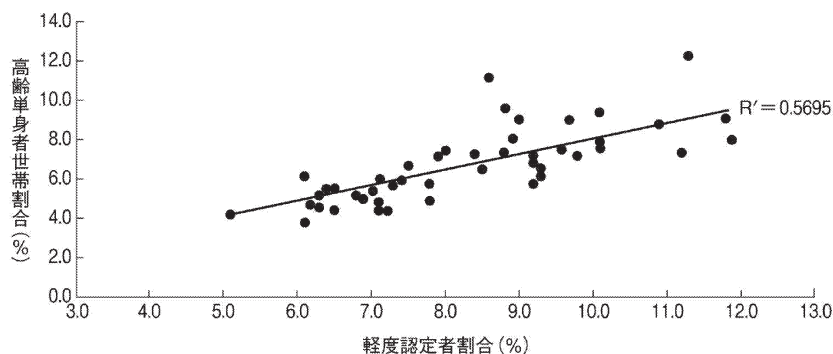
進化医学は、このことを人類が地球上に存在するようになって以降の大きな時間の流れで捉えます。つまり、私たちの祖先である「新人」(ホモ・サピエンス) が地球上に登場したのは今から5～10万年前頃ですが、当時から現在まで人間のBな組成はほとんど変化していません。一方、当時の人類の生活はどうだったかといえば、食糧が概して不足がちであるなかで、野原をかけまわるなどして狩猟・採集を行うか、せいぜい農耕生活を営む程度でした。つまり、私たち人間の体はそうした生活ないし環境にもっとも合うように「できている」のです。しかし人間を取り巻く環境は大きく変化し、当時の状況とはおよそ異なるものとなっています。

例えば、いま述べたように当時は食糧が欠乏しがちだったので人間の体には「飢餓に強い血糖維持機構」が備わっていますが、「飽食の時代」である現在ではこれが逆に糖尿病等の原因となっています。また、野原を走っていた当時はよく怪我をしていたので「止血系」が大きく発達しています。これが現在ではかえって血栓や動脈硬化の要因となっているのです。さらに花粉症や各種アレルギーなどは環境の変化に人間の体が追いついていないために生じるものであり、また、何とんでもこれだけスピードが速くなった時代において、様々なストレスが生じるのはごく自然のことです。

西欧近代医学は「身体内部に物質的な原因があり、それを除去すれば病気は治癒される」という考えのもとで発展してきました。それは感染症については大きな成果をもたらしましたが、慢性疾患を中心とするC「現代の病」には十分な解決をもたらしていません。

例えば、D「過労気味でうつになりがち」な人が、その労働時間や働き方を変えないまま、精神科に行って薬をもらい、また職場に戻るが事態は一向に改善されない、といった話をよく耳にします。私たちは「病気」というものについての見方を根本から変えるべき時期にきています。

図 高齢単身世帯(一人暮らし)割合と介護の軽度認定率の相関(都道府県別)



注：厚生労働省老健局「介護保険事業状況報告」および総務省統計局「国勢調査」より厚生労働省政策統括官付政策評価官室作成
 軽度認定者割合は2003年の値、高齢単身世帯割合は2000年の値。
 出典：『厚生労働白書 平成17年版』ぎょうせい、2005年。

つまり「X」という見方ではなく、実はむしろ環境と私たちとの関り、あるいは環境あるいは社会そのもののなかに病気の原因はあるのであり、社会や労働のあり方を含めてそれらを変えていかないと真の解決にはなりません。病や健康を環境全体との関りのなかでとらえる、新しい病観がいま求められているのです。

一方、医療・福祉に関する他の領域でも、人間にとって他者との様々な関りやコミュニティ、社会的なつながり等といったものが重要な意味を持つことが、様々な側面で明らかになってきています。

例えば、図は、高齢者の単身世帯（一人暮らし）割合と介護の軽度の認定率の相関を都道府県単位でみたものですが、単身世帯割合の高さと介護認定率との間に若干の相関が示されています。単純にいえば、一人暮らしで他者とのコミュニケーションなどが少ないと、（軽度の）要介護状態になる可能性が相対的に大きいということです。

こうした話題に関しては、近年、「社会疫学（Social Epidemiology）」と呼ばれる分野、あるいは「病気の社会的決定要因（social determinants of health）」というテーマに関する研究が進展し、人間の病気というものが、心理的・社会的・経済的等の要因と深く関り、それらを視野に入れた対応を行っていかねば解決にならないということが広く議論されるようになっていきます。経済的な要因に関しては、貧困など個人の経済的状況と健康との相関に関する研究も広がっています。また、近年、社会科学の分野で広く論じられている「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本。人と人との関係性やつながりのあり方に関する概念）」に関して、それと健康や医療との関りについても多くの研究や議論がなされています。

ところで、先ほど「人間にとって他者との様々な関りやコミュニティ、社会的なつながりなどといったものが重要な意味を持つことが、様々な側面で明らかになってきている」という言い方をしましたが、そうしたことはある意味で「あたりまえのこと」であって、何もわざわざ「科学が明らかにする」までもないことのようにもみえます。

この点を少し距離を置いて考えると、現代の科学は「古人の知恵」あるいは「常識」に回帰している、という大きな傾向が指摘できるように思われます。振り返れば、「近代科学」が提示する物の見方はことごとく「常識破壊的」でした。いわく「動いているのは太陽ではなく地球である」、「生物は機械と同じである」、「精神と物質は完全に別物である」等々……。そしてこうした常識破壊的な前提の上で、近代科学は一定の成果を上げてきたわけです。

これに対して、現代の科学が明らかにしつつあることは、少なくともその結論だけを見る限り、むしろきわめて「常識的」で、古くからの知恵を再確認するようなものが多いといえます。例えばしばらく前から「ストレスと免疫」の相関（「ストレスが免疫機構の働きに大きな影響を与える」）が明らかにされ、近年では「精神免疫学」といった分野も発展していますが、そこでの基本メッセージは要するに「Y」
ということであり、近代科学の「心と身体分離」という世界観とは逆の方向を示しています。また経済学の分野では「行動経済学」（ないし「経済心理学」）ということが話題となり、人間が「純粹に利己的ではない」ということが様々な実験等を通して明らかにされていると論じられています。そこで示される結論自体は多くの場合きわめて常識的なものです（もともと「行動科学（behavioral science）」という言葉は戦後の

アメリカにおいて、心理学を含めてあらゆる科学を「客観的・検証可能」なものにするという理念のもとで唱えられたもので、人間という存在を大幅に単純化して捉えるものでした。

私はここで、現代の科学が明らかにしつつある事柄の多くが「常識回帰的」であることをもって科学の意義を否定するつもりはありません。むしろ、あえて⁽³⁾ 希望的な観測を述べるとすれば、現在は「科学を人間の手に取り戻す」にあたつての⁽¹⁾ 好機であるともいえるでしょう。実際、人間という生き物は、現在の科学が想定するよりもはるかに「複雑」です。例えば医療におけるリハビリなどでは、概して C・外形的な「訓練」がなお中心ですが、農園の草いじりが好きだった人にとっては、そうした日常的活動や他者との関りこそが心身の最大の「リハビリ」であるでしょう。今後、脳科学などが発展して人間という存在の複雑性が明らかになればなるほど、ベッドに寝かせきりで薬漬けの「治療」ではなく、日常的な他者との関りや「ふつうの生活」ができるようなサポート体制こそが、最大の治癒や予防であることが示されるでしょう。その時科学や医学はもっと人間や生活に寄り添った本来のものとなりえます。私自身は、⁽⁴⁾ こうした今後の科学のあり方を「ケアとしての科学」と呼んでみたいと思います。

最後に、これからの科学のあり方に関する「モード2・サイエンス」という視点と医療との関りについて考えてみましょう。これは、医療ないし医療政策における患者・消費者の視点の重要性という点ともつながるものです。

「モード2・サイエンス」とは、イギリスの科学論（ないし科学技術政策）の研究者であるマイケル・ギボンズらが唱えている次のような考え方です。

簡潔に述べると、これまでの科学や学問の一般的なパターンであった「モード1・サイエンス」では、知識は個々のディシプリン（学問分野）の文脈のなかで生み出され、また実質的にはそれは、特定の科学者コミュニティ（共同体）において、主として学術的な関心が支配する世界のなかで問題が設定され解決されます。研究成果の価値は、その学問分野の知識体系の発展にいかんによって決まり、そして研究の成果は、学術雑誌、学会などの制度化されたメディアを通じて普及します。

これに対し、「モード2・サイエンス」の知識は、より広いコンテクスト、つまり個別の学問分野を超えた、「社会的文脈」のなかで生み出され、またそうしたいわば応用的な文脈のなかで問題が設定され解決されます。そこでは、個別の学問分野を超えた問題解決の枠組みが用意され、独自の理論構造、研究方法、研究様式が構築されます。そして参加者の範囲は広く、大学研究者のみならず、⁽⁵⁾ 市民、産業界、政府なども必要に応じて参加するし、また参加する必然性があります。

医療あるいは医療政策における患者・消費者の視点の重視という方向は、こうした近代科学のあり方全体の変容というテーマと⑤重なっていると考えられます。また、「モード2・サイエンス」という視点は、「個体を超えた人間理解」、つまり特定病因論的な見方を超えて、コミュニケーションや社会、環境とのDな関りのなかで人間の病や健康、あるいは人間という存在そのものを捉えていくという方向とも重なっていると思われます。

いずれにしても、医療や看護、福祉といった「ケア」に関する領域は、生命や人間そして社会の理解という点において、現代科学の先端的で興味深い展開と深く関連しており、そうした新たな人間理解を深めつつ、個々の実践を行っていくことが、それ自体において価値あるものと考えられるのです。

（広井良典「科学と医療・看護・福祉——新たな人間理解に向けて——」〈早坂裕子【他】編著『社会学のつばさ 医療・看護・福祉を学ぶ人のために』所収〉ミネルヴァ書房）

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の漢字と同じ意味をもつものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1

 ～

3

。

(ア) 過勞

1

① 過誤

② 看過

③ 過信

④ 通過

(イ) 好機

2

① 好惡

② 友好

③ 好調

④ 修好

(ウ) 重なつて

3

① 重心

② 荷重

③ 重篤

④ 多重

問 2 空欄 A ～ D を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはならない。解答番号は A ・

4

 、 B ・

5

 、 C ・

6

 、 D ・

7

。

- ① 全体的 ② 根本的 ③ 自己完結的 ④ 生物学的 ⑤ 機械的

問 3 傍線部(1) 「『現代の病』には十分な解決をもたらしていません」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 「現代の病」の原因は、生活習慣などの客観的な検証が困難なものであることが多いが、西欧近代医学は、病氣の原因は特定の物質であり、それを除去するのが治療であると考えるから。
- ② 「現代の病」は環境に対する不適応に起因するところが大きいのに対し、西欧近代医学は人間の身体の内部に病氣の原因を求め、それを取り除けば病氣は治るとしているから。
- ③ 「現代の病」は人間と環境の齟齬(そご)を原因とするものが多いにもかかわらず、西欧近代医学は新たな知見を取り入れようとせず、旧態依然とした治療法に固執しているから。
- ④ 「現代の病」の中心は慢性疾患であるが、それに対して、西欧近代医学は病氣というものを人間の身体の一時的な症状とみなし、それを改善するために薬理的な治療などを行うから。
- ⑤ 「現代の病」は人間の身体の内にある原因そのものを取り除かなければ改善しないが、西欧近代医学はそうには考えず、症状の一時的な緩和を目的としているから。

問 4 空欄 X を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 9。

- ① 健康と病氣は紙一重の関係にある
- ② 物理的な環境を改善すれば病氣は治る
- ③ 身体と同じように精神も病氣になる
- ④ 病氣はもっぱら身体の内にある
- ⑤ 環境こそが病氣を引き起こしている

問 5 傍線部(2)「常識破壊的」でした」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 当時は当然とされていたことに反していたということ。
- ② 目の前の現実よりも理論の方を優先したということ。
- ③ 複雑なものをあえて単純化して表現したということ。
- ④ 自明とされてきたことまで科学の対象としたということ。
- ⑤ 客観的に明白な事実に反するものであったということ。

問 6 空欄 Y を補うのに最も適当な成句を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① 医者いらず
- ② 良薬は口に苦し
- ③ 風邪は万病のもと
- ④ 病は気から
- ⑤ 医者の不養生

問 7 傍線部(3)「希望的な観測」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 12。

- ① 浅薄としかいいようがない個人的な見解
- ② 客観的な根拠を欠いた不確実な予想
- ③ 事実に着しく反する自分勝手な言い分
- ④ 絶対にかなうことのない荒唐無稽な願い
- ⑤ 合理的な根拠のない楽観的な見通し

問 8 傍線部(4) 「こうした今後の科学のあり方を『ケアとしての科学』と呼んでみたい」とあるが、筆者の考える「ケアとしての科学」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 13。

- ① 実験等を通じて得られた成果を、特定の科学者コミュニティでのみ共有するのではなく、医療を必要とする人々の生活の向上のために積極的に役立てていくようにする、これからの新たな科学のあり方である。
- ② 人間という生き物はこれまで考えられてきた以上に複雑であるという前提に立ち、患者や消費者の視点を参照しながら、人間にとって最良の生活環境とは何かを模索する、近代科学とは異なる科学のあり方である。
- ③ 近代科学のようにあえて常識を破壊しようとするようなことはせず、人間が健やかに日常生活を送ることができるように、「古人の知恵」というべきものの科学性を明らかにし、応用していこうとするものである。
- ④ 病気をはじめとする現象の原因を特定の物質に求めるのではなく、現象はさまざまな要因が複雑に関り合うことによって生じ、人間の身体もまた複雑な構造を持つものであると考える、これからの科学のあり方である。
- ⑤ これまでの科学が前提としてきた単純化された人間像ではなく、社会的な関りのなかで生きる現実の人間を前提とし、医療を必要とする人も日常生活世界にいられるようにすることを目指す、新しい科学のあり方である。

問 9 傍線部(5) 「市民、産業界、政府などにも必要に応じて参加するし、また参加する必然性があります」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 14。

- ① 「モード2・サイエンス」においては、「モード1・サイエンス」では対処することが困難な、複雑で先端的な問題を解決するための枠組みを、新たに構築することが要請されているから。
- ② 「モード2・サイエンス」においては、個々のディシプリンで生み出された知識を、多様な分野へと還元し、そこでの問題解決の枠組みに役立てていかなければならないから。
- ③ 「モード2・サイエンス」においては、知識は社会の応用的な文脈のなかで生み出され、問題解決に寄与するものでなければならぬため、科学研究者以外の多様な視点が求められるから。

④ 「モード2・サイエンス」においては、「モード1・サイエンス」で得られた科学的な知識を、個別のディシプリンを超えた問題解決の枠組みへと応用していかなければならないから。

⑤ 「モード2・サイエンス」においては、これまで以上に高い専門性が求められるだけでなく、広範にわたるさまざまな分野の知識を発展的に統合し、新たな知識を生み出す必要があるから。

問10 本文における筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 15。

① 本文中の図にもとづくと、一人暮らしで他者と関わる機会が少ない高齢者は、介護を必要とする状態になる可能性が相対的に高いと考えられる。しかし、それはある意味当然のことであり、これからの科学はそのような常識の価値を認めていくことが必要になる。

② 西欧近代医学が採用してきた特定病因論は、現代のような環境の変化や悪化を想定しておらず、そのために現代の病気に対して十分な解決を与えることができなくなっている。しかし、その点だけをもって特定病因論の意義が全否定されることにはならない。

③ 環境中に存在する原因物質によってたびたび人間の健康は害されてきたという事実を考えると、「環境」と「医療」は決して無関係ではない。その意味で、「環境問題としての医療」という発想は奇異なものではなく、今後その意義がさらに高まっていく。

④ 「環境問題としての医療」ということが言われるほど、現代の医療の対象はさまざまな領域へと拡大しているが、期待された成果を上げることはできていない。それは、科学が依然として「モード1・サイエンス」にとどまっているからである。

⑤ 現代では「病氣」の再定義が求められているが、そのときに参照すべきなのが「進化医学」である。進化医学は病気を、人間が環境に適応できないことによって発生すると考え、その上で、自然の摂理に従った生活に人間が回帰することを提唱している。

II 次の文章を読んで、後の問1～問9に答えなさい。

近代デザインの歴史がいつから始まるかということを正確な日付を持つて語ることはできないが、それまでの前近代の生活様式にかかわる表立ったそして①時として暗黙の複雑な社会的制度の崩壊がその始まりの前提になる。

ヨーロッパではフランス革命以降、衣服や生活用品に関する社会的規制は原則的には崩壊していく。一方、日本では、明治維新が古い制度からの離脱のとりあえずの区切りになった。生活用品や住居のデザインが社会的規制から解放されると、そうした一切のデザインをあらたにつくり出さなければならぬ。それが近代デザインの実践の前提になった。

つまり、近代デザインの出発は、誰もが他からの強制(力)を受けることなく、自らの生活様式を決定し、自由なデザインを使うことができるのだという前提を条件のひとつにしていた。ヨーロッパにおいては、それが唯一のものではないにしてもフランス革命を②契機とした市民社会意識の出現があったといっているだろう。

今日、わたしたちは、自らの経済事情が許すかぎりにおいて、どのような日用品や衣服を身につけるかは誰からも強制されることなく自由である。

かつて、近代以前の社会においては、デザインは複雑な社会的制度(階級や職業など)と結びついていた。どのような衣服を身につけ、どのような食器や家具などの日用品を使い、どんな住居に生活するのか。これは、自由を選択することはできなかった。衣服やもののデザインは、社会的なシステムを可視化したものであった。人々は、日々、自らの衣服やもののデザインによって、自らの職業や階層を確認しているのであり、したがって、③それを捨て去ることは、時としてシステムへの暗黙の異議となる可能性を持っていた。

日本では、中国の制度をモデルとした律令格式が八世紀から九世紀にかけてつくられた。これには、衣服や色使いに関するつまりデザインに関する規制が含まれている。この制度はやがて日本的なアレンジがなされていった。たとえば、紫の衣服はもともと高位の者にしか身につけることができないことであるとか、喪服の規則であるとかきわめて細目にわたった禁制があった。デザインに関しては江戸期にかつての規制はかなり変化した。いずれにしても、儀礼に関する規則とともに、デザインに関する禁制は、権力による制度とシステムを可視化する機能を持つがゆえにきわめて重要なことであった。デザインの持つ重要性のひとつは、目に見えないシステムや関係を可視化するところにあった。

ヨーロッパにおいては、一八世紀のフランス革命、そして一九世紀に及ぶ産業革命を通して、以来、デザインはそれまでの制度から解放されていくことになる。それは社会全体が新しい機構と組織を形づくっていくことと関連していた。新しい社会は新しい約束事とシステムを持たな

ければならなかった。一般的には、この時点において、個人と個人、個人と社会あるいは国家とのあらたな約束（契約）が提唱されることになる。そして新しい社会を人工的に構築しようという思考は、そのまま新しいデザインを求めたのである。このことが近代デザインの出発を促していた。つまり、X ことになる。

日本でも原則としては、明治維新以降、わたしたちの生活を取り巻くデザインは古い制度から解放されることになった。それぞれの経済的事情に従ってどのようなデザインも自由に使える。つまり、デザインは古い社会的な制度から市場経済のシステムに委ねられたということもできるだろう。⁽²⁾ このことはきわめて大きな意味を持つ。デザインは資本主義的な市場経済の約束事に委ねられたのである。たとえば、経済的に許されるのであれば、それまでの暗黙のうちの複雑な社会的制度としてあった職業や階級にかかわる消費は一気に飛び越えられるということになる。実際に、そうした事態がもっとも早く実現したのは、大量生産を早くから実現したアメリカにおいてであった。

古い社会的な制度から離れて人々が自由にものを消費するようになるのは、ヨーロッパにおいては、実際には、二〇世紀に入っただいぶ経つてからのことであった。社会学者のスチュアート・ユエンは、第一次大戦後にアメリカにやって来た移民の女性が、アメリカの食料品店で買い物をする行為によっていかに階級を超えた「自由な消費者」の気分を味わったかというエピソードを紹介している。当時、ヨーロッパではまだ、たとえ経済的に可能ではあっても階級に従って消費を行なうことが一般的であった。

ともあれ、過去の生活様式から解放され、一九世紀の産業先進国のイギリスでは、ものの生産方式の変化とともにあらたなデザインへの模索が始まる。

一九世紀の産業社会では、古い制度から解放されあらたな生活様式や生活環境をいかにデザインするかということへとしだいに目がむけられていった。とはいえ、早々にあらたな生活様式や環境を示す新しいデザインを提案することはできなかった。そうした状態の中にあつて、デザイナーたちは、過去の歴史的様式を⁽³⁾ 折衷するいわゆる「歴史主義」（ヒストリシズム）と呼ばれるデザインを実践することになった。

この「歴史主義」と呼ばれるデザインの出現とその受容は、一九世紀における時代精神とある面では結びつくものであったといえる。一九世紀は博覧会と博物館の時代であった。つまり、この時代は、事実と計量可能であることが重視された。それは、一九世紀の産業社会の実証主義的な精神を反映していた。世界をものという情報としてひとつの場所に集め、カタログ化して見せるということもまた実証主義的精神の現れであり、それは博物館とともに博覧会の開催を促進することになった。たとえば、一九世紀の産業先進国イギリスにおける大英博物館の成立、そして世界で最初のデザイン博物館であるヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム（V&A）の設立といったことにも⁽³⁾ それは現れ

ている。V&Aは、一八五一年の第一回ロンドン万国博の収集品を基礎にしている。つまり歴史的過去の様式は、歴史的事実として認識され受容されることになったのである。

(注1) ハンス・H・ホーフシュテッターは『ユーゲントシュティール絵画史』の中で、一九世紀の精神空間について《いわゆる「泡沫会社時代精神」(Gründertum)の資本主義的支配層を成立せしめるところの、世界観的実証主義の精神空間である。実証主義と泡沫会社時代精神(その結果としての無神論)、相互に規定しあう補完物たるこの両者は、世界観としては使いこなせない科学的な探求や発見の産物であり、同様にまた、結果として社会的階層区分を産みだし、経済的には強力ではあっても精神的には指導能力のない支配層を成立せしめた、増大する産業化の産物である》と指摘している。

一九世紀の産業社会は、実証主義的な精神空間と結びつき、そこでの知は、事実性と計量可能性、そして統計学的な視点によって「真」を認めるというものであった。それは、全体的な関連を失った膨大な細部の集合でしかなかった。

一九世紀半ばは、特定の新しい装飾様式を持たないまま、歴史的装飾様式を引用し、また折衷することで、家具をはじめとして、日用品のデザインを行っていた。とりわけ、機械生産が導入されることによって、そうしたデザインがそれまで以上に大量に出現し始めることになったのである。装飾様式の混乱は、生活様式の混乱を感じさせるものであった。そうしたデザインは、たしかに過去の様式という事実には依拠はしていたが、さまざまな寄せ集めであり、全体としての統一性を欠くものであった。それは、ホーフシュテッターが、「経済的には強力であっても精神的には指導能力がない」とする産業ブルジョワジーの存在と見合っていたといえるだろう。「歴史主義」デザインにおける様式的混乱について、ホーフシュテッターは、Yしたフォルムをかき集めて様式をつくりそれを大衆化したものだと述べている。

言い換えれば、過去の生活様式から解放されたにもかかわらず、かつてのような統一性を提案できない時代精神と「歴史主義」デザインは結びついていったといえる。

「歴史主義」デザインを受け入れたのは、新しい支配層である産業ブルジョワジーであった。彼らの生活空間(室内)はどのようなものであったのか。(注2) ヴァルター・ベンヤミンは、次のように述べている。

大都市において私生活の痕跡が失われてゆくことにたいする、補償をもとめる努力が見られる。その努力は家庭の内部でなされる。まるでかれらは、かれらの地上の日々の痕跡とはゆかないまでも、日用品や小間物の痕跡を、なんとかして未来永劫にうすれさせまいと、名誉をかけているかのようだ。かれらは根気よく、たくさんの物の押型をとる。上ばきや懷中時計、寒暖計や卵立て、食器や雨傘のために、か

れらは入れものを、ケースをこさえる。(中略) 人間はアクセサリー一式とともにそのなかへはめこまれる。化石となった太古の動物のように、だいにされるのはかれの痕跡である。

全体への関連性を欠如した知識と趣味が広がるとともに、都市化される環境の中にあつて、個人の痕跡をみずから感じられなくなることへの不安、つまり、近代に特有な自己のアイデンティティにかかわる不安こそが、さまざまな事物を室内に集めさせることになった。こうした個人の室内の誕生と、博物館的な知識の寄せ集めが行なわれたのは同時代のことであり、それらは相互に無縁ではない同時代の感覚と思考を反映している。

このように、新興階級のブルジョワジーたちによる社会は、一方では全体性の欠如した断片的な知の寄せ集めと、統計的な手法による「真」の確定という実証主義的な精神空間の中にあつた。そして、そうした精神空間を映し出すよう(4) 骨董屋のような室内があつた。

こうした装飾様式の混乱、そして統一性のない断片的な寄せ集めのデザインに対して、やがて一九世紀後半、イギリスでは(注3) ウィリアム・モリスを中心としたアーツ・アンド・クラフツ運動、あるいは世紀転換期にアール・ヌーヴオーといった装飾様式が提案される。また、二〇世紀前半における(注4) バウハウスなども、歴史主義とは異なるあらたなデザイン提案のプロジェクトとして展開されることになる。

(柏木博「近代デザインにむかつて」〈柏木博監修『近代デザイン史』所収〉武蔵野美術大学出版局)

(注1) ハンス・H・ホーフシュテッター——ドイツの美術史家(一九二八—二〇一六)。

(注2) ヴァルター・ベンヤミン——ドイツの思想家、評論家(一八九二—一九四〇)。

(注3) ウィリアム・モリス——イギリスのテキスタイルデザイナー(一八三四—一八九六)。

(注4) バウハウス——ワイマル共和政期のドイツに設立された、美術と建築に関する総合的な教育を行つた学校。また、その流れをくむ合理主義的、機能主義的な芸術を指すこともある。

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答

番号は 16 18。

(ア) 時として 16

- ① しばらくは
- ② 場合によっては
- ③ とりあえずは
- ④ 最終的には
- ⑤ 差し当たっては

(イ) 契機 17

- ① 機制
- ② 機先
- ③ 投機
- ④ 機縁
- ⑤ 枢機

(ウ) 折衷する 18

- ① もとのまま受け入れる
- ② より良いものに作り変える
- ③ 組み合わせで一つにする
- ④ 異なる分野で応用する
- ⑤ 新しいものへと翻案する

問 2 傍線部(1) 「それを捨て去ることは、時としてシステムへの暗黙の異議となる可能性を持っていた」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 19。

- ① 近代以前の社会では、日用品や衣服に施されたデザインは単なる意匠ではなく、社会的なシステムを可視化し、それを所有する人の地位や身分を表現する役割を担うものであったから。
- ② 近代以前の社会では、人々は自分の職業や階層を表現するための手段として、特定のデザインの日用品や衣服を選んでいたため、デザインは職業や階層を可視化するメディアとなっていたから。
- ③ 近代以前の社会では、デザインは個人が自由に作り出したり、選んだりできるものではなく、そのときの権力や社会システムにより、すべての人に同じデザインが供給されていたから。
- ④ 近代以前の社会では、新しいデザインを勝手に作り出すことは許されておらず、もしそのようなことをすれば、既存の社会システムから疎外されることになりかねなかったから。
- ⑤ 近代以前の社会では、どのような社会的身分の人間が、どのようなデザインの日用品や衣服を所有することができるかということが、可視化されたシステムによって定められていたから。

問 3 空欄

X

を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 20。

- ① 因習的な権力や制度に縛られることのない、普遍的な近代デザインが生まれる
- ② 近代において成立したデザインは、あらたな制度とシステムの構築へとつながる
- ③ デザインの刷新こそが、近代的な価値観やそれに依拠する諸制度の成立を促す
- ④ 近代社会における思考や意識そして感覚、また想念が近代デザインに投影される
- ⑤ 近代デザインはあらたに、社会的関係を象徴する記号としての役割を果たす

問 4 傍線部(2) 「このことはきわめて大きな意味を持つ」とあるが、筆者がこのように言うのはなぜか。その理由として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 21。

- ① デザインが社会的規制から解放され、市場における需要を取り入れて行われるようになると、それまでには考えられなかった新しいデザインを施した商品が次々と供給されるようになったから。
- ② デザインを自由に行うことを妨げてきた古い社会的な制度が弱体化すると、それとともにデザインは市場経済のシステムに委ねられるようになり、ついには資本主義的な大量生産の対象になったから。
- ③ デザインが因襲的な制度に縛られることがなくなり、資本主義的な市場を通じて供給されるようになると、人々はデザインを自由に選べるようになったが、その一方で社会は混乱に陥ることになったから。
- ④ デザインのあり方を規制していた旧来の制度が崩壊すると、デザインは職業や階級を可視化するものではなくなったが、新たにそれを消費する人々の経済力を象徴的に表現するものになったから。
- ⑤ デザインが資本主義的な市場経済のシステムによって供給されるものになると、人々は経済的な条件さえ許せば、自分の社会的な属性とはかわりなく、自由にデザインを消費できるようになったから。

問 5 傍線部(3) 「それ」の指示内容として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 22。

- ① 生活様式や環境
- ② 過去の歴史的様式
- ③ 一九世紀の産業社会
- ④ 実証主義的精神
- ⑤ 大英博物館の成立

問 6 空欄 Y を補うのに最も適当な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 23。

- ① 四散
- ② 異化
- ③ 捨象
- ④ 昇華
- ⑤ 静止

問 7 傍線部(4) 「骨董屋のような室内」に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 24。

- ① 全体の統一性がまったくなく、その点が産業ブルジョワジーにおけるアイデンティティの不在を如実に表している。
- ② 実証主義的に知を求める時代精神を反映しているが、全体性を欠き、さまざまな事物をただ集めただけになっている。
- ③ 博物学的な興味に駆られた産業ブルジョワジーが、博物館や博覧会を模倣して作り上げた個人的な生活空間である。
- ④ 近代以前に見られた大時代的な装飾様式をそのまま受け継ぐ「歴史主義」が、部屋の間々にまで反映されている。
- ⑤ 産業ブルジョワジーの経済力を背景として最新のデザインを取り入れ、歴史的事実を克服しようとする雰囲気漂う。

問 8 以下に示すのは、二重傍線部の内容をもとに生徒が話し合っている様子である。本文を踏まえた発言として**適当ではないもの**を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 25。

- ① 生徒A——二重傍線部で言われていることは、わたしたちには当たり前のことのように思えるけど、歴史を振り返ると、いつの時代も日用品や衣服を自由を選べたわけじゃないんだね。近代以前のヨーロッパでは、職業とか地位とかによって選べるものが限られていたみたいだし、日本でも、江戸時代までは規制が重要な意味を持っていたみたいだ。
- ② 生徒B——そう考えると、服のデザインというものが持つ意味も明らかになってくるよね。つまり、服のデザインはそれを着る人の職業や地位を表現するものであって、服装を自由に選択させないように働きかける力があることを示していると言えるんじゃないかな。そういう意味では、わたしたちの制服も同じようなものだと私は思う。

③ 生徒C——私は制服があるのがあるがたいんだよね。毎日着る服を選ばなければいけないってことになったら、大変だよ。さっきAさんが近代以前の話をしていたけど、近代へと移行したヨーロッパでは、デザインをめぐってかなりの混乱があったと本文に書いてあった。古い体制から解放されるということには、それなりのリスクがあるんだよ。

④ 生徒D——たしかにそうだね。何でもかんでも自由になると、逆に困ったことになる。本文を読むと、近代ヨーロッパでは、資本主義体制があらたなデザインのあり方を決めることになったみたいだ。市場で淘汰が起きて、デザインはおのずから一定の範囲内に収まることになる。でもこれは、二一世紀の今でも変わらないよね。

⑤ 生徒E——Dさんが言う通り、資本主義がデザインに与えた影響というのはあると思うんだよね。でもそれは、市場で淘汰が発生したというのではなく、市場を通じてデザインが自由に消費されるようになったということだと思う。それが、二重傍線部で述べられている今のわたしたちの状況にもつながってくると考えるのが妥当だよ。

問 9 次のア～オについて、本文の内容と合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。解答番号は

30

。

- ア 一九世紀の産業社会では、何事も計量可能であるべきだとされ、デザインにおいても幾何学的な装飾様式が流行した。

26

- イ アイデンティティに不安を抱える産業ブルジョワジーは、個人の室内を物で埋め尽くすことで、それを解消しようとした。

27

- ウ 過去の生活様式から解放された近代という時代は、あらたな生活様式や生活環境のデザインを求めた時代でもあった。

28

- エ アーツ・アンド・クラフツ運動をはじめとする反歴史主義的な運動は、生活用品や住居のデザインの自由化を目指した。

29

- オ フランス革命後のヨーロッパでは、デザインを規定していた社会規則は崩壊したが、人々は「自由な消費者」ではなかった。

30

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問1～問11に答えなさい。

文明論的観点から見た最大の問題は、20世紀の文明が引き起こした工業化と都市化であり、その結果、地球の持つ本来の生態系が破壊され、もはや地球自体の気候変動も容易ならざるところまで来ていることは、最近の気温の高温化、海水温の上昇に表れている。CO₂濃度の上昇はもとより、異常ともいえる豪雨や高温による山火事、熱中症による死者数の増加はその顕著な例である。これらはすべて、気候変動そのものであることは(ア)言を俟たない。

このような異常現象や変化が分野を超えて、しかも同時に起こり始めている状況は、過去の歴史にも数えるほどしかない。(イ)管見ながら、「生命の種」が激増した古生代前期、いまから5億年ほど前のカンブリア紀の「爆発」を生み出した時期以外に知らない。その時期には、生物の「性の誕生」といわれている爆発的進化が起こったのである。【①】

そしていま、われわれはこのような変革期に遭遇しているという認識を持つことが大切であり、何より重要なのは、この限られた地球という惑星の生態的環境を維持しているのかという認識ではないだろうか。文明の進化は、常に人間にとつての快適性、利便性の追求の結果であり、そのために人類の英知が(エ)動員され、科学技術の爆発的進化を勝ち取ってきた。そしてその受け皿として、建築や都市の進化が生み出されてきたのである。モノづくりに関しても同様に、工業化がその発展を後押ししてきたのであるが、行き過ぎた工業化が現在の地球との生態的バランスを大きく歪めることになってしまったのである。

その一方で、人間はバランスの崩れを科学の力で乗り越えることを妄信し続けてきた。【②】ところがいま、その妄信に疑念が起こり始めている。まさに現在のウイルスの暴走が、科学の限界を露わにしたのである。現代の最先端医療でも手が付けられない状況がこれを物語っている。

さて、以上のような文明論的観点から見て、われわれに問われていることは、都市社会のあり方を再考することではないだろうか。

ここで筆者の独断的結論を先に示したい。それは、(カ)都市の構造を大きく変えることである。都市化された地域は、地球上の陸地のわずか2%に過ぎないが、問題はその過密さと、都市機能を維持するために自然が破壊され、膨大なエネルギーが浪費されているという現実である。気候変動も、ウイルス問題も、政治的領土問題、さらには人間という精神的安定性、自然との調和など、すべてがこの過密化された都市問題に

帰着するのではないか。

それゆえ、これからの文明社会においては、従来の文明の根幹をなしてきた、利便性を最優先にして過密化された都市社会のあり方を再考することが必要なのではないだろうかと考えている。A、人間が求め続けてきた快適な環境についての再考である。閉じられた高密度な環境の中で、快適で利便性の高い都市や建築を求めることは、果たして人間を含めた多様な生物にとって真理の道となり得るのであるか。人間という特殊な進化を遂げてきた生物種と、人間を取り巻く自然、その関係の原点に立ち返り、新たな共存の姿を探る必要がある。それには、過剰に人工化した都市のあり方を見直すことでしか対処できないだろう。

こうした認識の根本にあるのは、X、快適性や省エネなどについて、人間中心主義的に考えていることへの危機意識である。地球という生物圏の中における人間存在をどのように捉えるか、その捉え方の問題である。地球という閉じた環境下で、物質が循環し、生物の生存にふさわしい環境の調和が保たれてきた。その循環が乱れれば、生存環境が危機に陥るのは必然であろう。人間も生物の一員である以上、どのように繁栄を謳歌^{おおか}していても、(3) その環境を無視することはできないということである。

それだけに、人間が利便性を追求するあまりに過剰に人工化を進めてきた都市や建築に自然を呼び込む方法を考えることがいま求められているのではないか。その答えは、ごく簡単にいえば、都市や建築の半分を自然に返すことではないだろうか。すなわち、人工化された環境をできる限り減らし、都市や建築に対して自然環境の割合を等価にまで高めることで、それぞれの持つ(2) ギャパシデーを開放することである。それは言い換えれば、自然環境と人工環境との「取引」(デール) という概念を持つことだと考える。

この考えは自然環境を高密度化した人工環境に網の目(織物)のように織り込むことである。自然とは、ただ森を残す、B 大きな緑の公園をつくるという発想ではなく、それぞれ施設(建築物)のある敷地内に自然を強制的に取り込む制度が不可欠であるということである。こうした自然の分散化と連携化を生み出す方法(織り込み型都市)は、自然を大きく残すという都市とのあり方より生態的には効果的であるという実証的分析がある。

現在の都市や建築の考え方においては、環境の悪化に対し、Y な取り組みに向かうだけで、気候変動のZ 解決に向かう姿勢が見えてこないところに問題がある。もちろん、CO₂の削減を積極的に進めることは正しいが、それだけではもはや問題が見えなくなる恐れがある。こ

のままの状態が続けば、相当な気温の上昇は避け難いことになるだろう。

日本のような比較的温暖な環境では、建築の断熱化をここまで高めて、閉じた建築をつくることが本来なのか。【③】むしろ、日本家が本来持っていた開放的な建築を望む向きもあることを忘れてはならないだろう。多少の暑さや寒さに対しては、使う側の知恵で乗り越えていけばよいのだ。ただし、現在の温暖化した気候ではそうした対処は難しいだろう。そのためには気候を（半世紀ほど時計の針を戻すことが必要である）。

例えば、北欧のような寒冷地域においては断熱性の高い建築は不可欠だが、温暖地域では、そうした断熱の必要性はそれぞれに異なってくる。熱帯地域では断熱化も必要だが、日陰と風通しの良い環境がより重要であり、何よりも自然な風情を取り込むことが可能である。

それ以上に、C 人間はそれぞれの生き方や住まい方を望むものである。夏になれば、服装も薄着を基本に、京都の町家のように住み方も変える。冬になれば、厚着をして、暖炉のように火のある環境を取り込む。秋になれば、さわやかな開放的な環境を求めることができる。春は冬からの目覚めだ。CO₂の排出も人間が暮らしていくためには避けて通ることはできないが、わずかな過去にそうであったように、自然によるCO₂の吸着能力が十分であれば何ら問題はないはずである。【④】

本来、動物はすべて自然とともにあったが、人間という特殊に進化した生物が打ち立てた文明は、自然界と次第に距離を置くようになり、極めて高度な人工世界を築いてきた。

現代になって、⁽⁵⁾ その乖離、歪みが極めて大きくなった。その結果、地球が本来持っていた生態的機能の限界に至ったのである。

われわれは、いま地球温暖化という現実的な危機に対してさまざまな取り組みを始めている。省エネルギーのための施策もきめ細やかに練られている。そしてCO₂の排出量を削減するための方法も多く考えられている。D、問題はその対処に向かう姿勢である。

20世紀の行き過ぎた文明を新たな時代に合わせた文明、すなわち地球環境の生態的バランスを取り戻す文明へと変容するためのチャンスがいまなのではないか。それが、まさにこの文明の変曲点という認識と自覚が必要なのではないか。米国の著名な経済学者であり生物学者でもあるバリー・コモナー（1917—2012年）は、環境問題がこれほどまでに深刻化する50年以上も前に、「もし今後、生き延びなければ、生態的考慮を経済的・政治的考慮に優先させなければならないだろう」と述べた『なにが環境の危機を招いたか』。【⑤】

無論、こうした取り組みを進めるには長い時間と強い覚悟が不可欠である。しかしながら、地球環境に取り返しのない危機的結果を与えるに至った現在こそ、その課題に取り組むスタートを切るための最後のタイミングではないか。これこそがわれわれに与えられた使命と考えた

いと思う。

(細田雅春『いま社会は建築に何を期待しているのか』 日刊建設通信新聞社)

*問題作成上の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の言葉の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。 解答

番号は

31

 ～

33

。

(ア) 言を俟たない

31

- ① あらためて言うまでもない
- ② 言わなければわからない
- ③ これまでに散々言われている
- ④ 言ったところで仕方がない
- ⑤ それとなく言われている

(イ) 動員され

32

- ① 取り入れられ
- ② 問い直され
- ③ 集められ
- ④ 重んじられ
- ⑤ 用いられ

(ウ) キャパシティー

33

- ① 自浄作用
- ② 蓋然性
- ③ 効能
- ④ 依存度
- ⑤ 容量

問 2 空欄 A 〓 D を補うのに最も適当な言葉を、次の①〓⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを二度用いてはならない。解答番号は A・34、B・35、C・36、D・37。

- ① すなわち ② しかし ③ そもそも ④ あるいは ⑤ たとえ

問 3 傍線部(1)「管見ながら」とあるが、この表現に関する説明として最も適当なものを、次の①〓⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① 管見は「偏った見方」という意味であり、「管見ながら」は、了見がいかに狭いことを強調するために用いる表現である。
② 管見は「狭い見識」という意味であり、「管見ながら」は、自分の考えを謙遜しつづつ述べるために用いる慣用的な表現である。
③ 管見は「先入見」という意味であり、「管見ながら」は、主観的な感想でしかないことを自ら認める際に用いる慣用表現である。
④ 管見は「自分の所見」という意味であり、「管見ながら」は、持論を述べる際の前置きとして用いる形式的な表現である。
⑤ 管見は「見当違い」という意味であり、「管見ながら」は、世間一般で言われていることを批判する際に用いる表現である。

問 4 傍線部(2)「都市の構造を大きく変える」とあるが、筆者はどのように都市を変えるべきだと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①〓⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 39。

- ① これ以上自然に負荷をかけることがないよう、都市を閉じられた高密度なものにし、その中でのみ利便性と快適性を追求していく。
② 人工環境と自然との融合を進めるために、まずは建築のあり方を再考し、開放的な建築を主体として都市を構成するようにする。
③ 文明的な観点から都市のあり方を見直し、これからいっそう激しくなることが予想される気候変動に対応できる都市を構築する。
④ 都市の利便性を維持するために自然を搾取するのをやめ、都市の内部に自然を取り込むことによって、人間と自然の連携を実現する。
⑤ より持続的に都市と自然の共存を図っていくために、都市の内部の一定割合の土地を開発せず、自然をそのまま残すようにする。

問 5 空欄

X

を補うのに最も適当な表現を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 40。

- ① 気候変動の影響を狭い視野で捉え
- ② 自然を文明の必要条件であると捉え
- ③ 文明の閉塞的状况を悲観的に捉え
- ④ 人間と自然との関係を相対化して捉え
- ⑤ 都市や建築のあり方を閉鎖系で捉え

問 6 傍線部(3)「その環境を無視することはできない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 41。

- ① 地球という閉じた環境の中で、人間と自然は共存してきたが、文明が発達し、人間が自然を搾取するようになると、環境は悪化の一途をたどるようになった。しかし、これからも人間が文明の恩恵を享受するためには、環境をこれ以上破壊することは許されないから。
- ② 地球という閉じられた高密度な環境の中で、人間は便利で快適な文明的生活を築き上げてきたが、現代ではさまざまな環境問題が顕在化している。そのような問題を放置し、対策を怠れば、今後さらに環境は悪化して、人間も生きていくことができなくなるから。
- ③ 地球という生物圏の中で、生物はこれまで環境に適応しながら生存し、再生産を行ってきたが、20世紀に進行した都市化は、その環境を容易ならざるところまで破壊してしまった。そうになると、人間が都市の中で快適な生活を送ることに少なからず影響が出るから。
- ④ 地球という一つの系の中で物質が循環することで、生物が生存するための環境は保たれてきたが、人間が文明を過度に発達させたことにより、その環境は破壊されつつある。だが、人間も生物の一種である以上、環境が危機に陥れば自らの生存が脅かされることになるから。
- ⑤ 地球という一つのまとまりのある環境の中で物質は循環し、そうすることで生態系は維持されてきたが、人間が都市を発達させて以降は、環境の調和が崩れてしまった。そうになると、人間が自然と共存し、ともに繁栄していくということも困難になってしまうから。

問 7 空欄

Y

Z

を補うのに最も適当な言葉の組み合わせを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 42。

- ① 前近代的―将来的
- ② 対症療法的―根本的
- ③ 物理的―思想的
- ④ 私的―社会的
- ⑤ 断続的―加速度的

問 8 傍線部(4)「半世紀ほど時計の針を戻すことが必要である」とあるが、筆者が気候についてどのように考えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 43。

- ① 北欧などの寒冷地域にくらべれば、日本の環境は温暖であり、その意味では、閉じた建築よりも開放的な建築の方がふさわしい。しかしながら、温暖化の進んだ現在の気候では、夏の暑さに対応することは難しいから。
- ② 日本の穏やかな環境では、建築の密閉性を高めて夏の暑さに対応するのではなく、さまざまな知恵を働かせることで、暑さをしのぐことができるはずである。だが、近年の建築はそれもできないほど画一化してしまっているから。
- ③ 日本でも温暖化の影響は発生しており、特に近年の夏の暑さは異常である。このままの状態が続けば、相当な気温の上昇が見込まれ、夏に涼しいとされてきた日本の開放的な建築も、住まいとしてふさわしくなくなるから。
- ④ 温暖化によって日本でも密閉された建築が普及し、それがまた、温暖化の原因であるCO₂の排出を増やすという負の循環が起きている。このまま温暖化が続けば、CO₂の排出がさらに増えるのは間違いないから。
- ⑤ 日本では、四季それぞれの特色を生活にいかすことのできる開放的な建築が望まれる傾向があり、それが日本に特有の生活様式を育んできた。しかし、今の夏の暑さはどう知恵を絞っても生活にいかすことはできないから。

問 9 傍線部(5)「その乖離」とあるが、何と何が乖離しているのか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 44。

- ① 気候と建築
- ② 住まい方と服装
- ③ 動物と自然
- ④ 自然界と文明
- ⑤ 文明と人工世界

問 10 次の一文が入るべき箇所を、本文中の【①】～【⑤】のうちから一つ選べ。 解答番号は 45。

【それこそいまに生きているわれわれに与えられた大きな命題なのである。】

問 11 次のア～オについて、筆者の考えと合致するものは①、合致しないものは②を選び、それぞれ記号で答えなさい。 解答番号は 46。

ア 人間もまた生物の一員である以上、その生存基盤である地球が危機に陥れば生きていくことはできず、そのような文脈においても、現在の都市のあり方を大きく見直し、人工環境に自然を網の目のように織り込むことによって、自然の分散化と連携化を図ることのできる都市を構想することには意義がある。 46

イ 環境問題が今ほどまでに深刻化する前に、自然環境にかかわる問題を政治的、経済的課題として扱うべきであると主張した人物がいたが、その主張の意義は今ではさらに大きくなっており、地球温暖化をはじめとする気候変動の問題についても、まず、それが政治や経済に与える影響を検討しなければならない。 47

ウ 文明論的観点から見た最大の問題とは、20世紀の文明が引き起こした過剰な工業化と都市化であり、さらに、それが遠因となって発生した現在の地球温暖化であるが、今後も文明を安定的かつ持続的に発展させていくためには、人工環境と自然環境との間に「取引」を成り立たせるのが不可欠となる。 48

エ 都市的な利便性と快適性をこれ以上追求すれば、地球環境に破滅的な事態をもたらすことになりかねないという意味で、われわれは今、文

明の変曲点ともいえる時期に立たされており、それはまた、人間中心主義的な思考から脱却し、人間と自然が共存する方法を探る最後の機会に立たされているともいえる。

49

オ 地球温暖化という現実的な危機に直面し、われわれはさまざまな取り組みを始めており、たとえばCO₂の排出削減を進めるための方法などが検討されているが、より重要なのは、文明のあり方を新たな時代に合ったものへと転換し、地球環境の生態的バランスと両立するものにしていくことである。

50